

2026 年度前期 大学入門ゼミフィールドワーク報告書

天王寺動物園



はるかすキャンパスにて(撮影:2026 年5月 23 日、渡辺和之)

阪南大学国際学部国際観光学科

渡辺ゼミ

はじめに

国際観光学科 教員 渡辺和之

2026 年 4 月、渡辺ゼミでは、1 年生 15 人（男子 7 人、女子 8 人）を迎えました。そこに新入生をサポートする SA(Student Assistant)2 名と教員を含めた 19 人という大所帯で今年度の大学入門ゼミは幕を開けました。

大学入門ゼミでは観光学の基礎知識を学ぶことを同時に、同じ入門ゼミ生の学生と仲良くなり、学校生活に馴染むことを目的としています。前期の大学入門ゼミでは、毎年日帰りで大阪市内を中心としたフィールドワークを行っております。

今年も 5 月 23 日（土）午前 10 時に 1 年生全員であべのハルカスキャンパスに集合し、ゼミごとに別れて大阪市内観光に出かけました。渡辺ゼミでは今年も天王寺動物園へ行きました。「また動物園」とも思いましたが、動物園の良い所は何度訪れても楽しめる点にあるかす。学生たちは、童心に帰って動物園の遊具の置物の上に乗って遊んでおりました。新しい動物園の楽しみ方なのかもしれません。

動物園は現地で学ぶという点でもよい施設です。動物にはまったく知識がない学生が、看板を読みながら動物について学ぶことができます。最近では、QR コードを読むと、動物園の HP に飛んでさらに詳しいことを学ぶことができます。

学生たちは各自、関心のある動物について調べ、レポートを書きました。レポートを書く際には、必ず図鑑も参照させています。図書館にある学研の『動く図鑑 Move』と荒俣宏（編）『世界大博物図鑑』には毎年お世話になっております。生き物にはまったく関心がなかった学生が鳥類や動物の世界に知的関心をもつたすけになっています。

「動物園に行くことが観光なのか」という疑問を持たれる方もいるかもしれません。動物園には世界中から動物がやってきます。サバンナや熱帯雨林の世界を、動物を通じて親しむことができます。動物を通じて世界に親しむ、それが動物園の良い所でもあります。

観光は何でも入る玉手箱だと私は考えております。学生が関心を持ったことは何でも観光の枠の中に収まってしまいます。国際観光学科では、広く学生の関心を伸ばしながら観光学を学ぶ教育をおこなっております。1 年生には 4 年間で自分の好きなことを伸ばす機会をおおいに利用して欲しいと思います。

以下、学生のレポートをお読みいただければと思います。



写真1 遊具に乗って写真を撮る。これも動物園の新しい楽しみ方なのかもしれません。
撮影：渡辺和之。



写真2 かなり苦勞して上がっていました。撮影：渡辺和之。

天王寺動物園にいたサルの種類について

国際観光学科 1 年 下川陽菜

なぜサルにしたか

私はサルについて調べることにしました。サルは人間に最も近い生物だと聞いたことがあります。見た目や行動など人間と似ている部分が多く、どのような特徴や生活をしているのか興味があり、調べることにしました。

天王寺動物園にいたサルたち

天王寺動物園では、以下の 7 種類のサルを見ました。

1.ドリル

サル目、オナガザル科。学名は *Mandrillus leucophaeus*. 特徴は森林で暮らし、住処から離れた開けた土地を嫌います。真っ黒な顔と、顔の周囲に生える白い毛が特徴的です¹⁾。

2.フクロテナガザル

サル目、テナガザル科。学名は *Symphalangus syndactylus*. 特徴は喉に大きな袋を持ち、大きな声で合唱するように鳴きます。その鳴き声は、4 km先まで届きます²⁾。

3.フランソワルトン

サル目、オナガザル科。学名は *Trachypithecus francoisi*. 特徴は樹上で生活し、木の葉を主に食べています。大人は黒い毛と頬の白い毛が特徴的だが、赤ちゃんは金色の毛をしています³⁾。

4.クロシロエリマキキツネザル

サル目、キツネザル科。学名は、*Varecia variegata*. 特徴はマダガスカル島にだけに生息するサルで、耳から顎にかけて房毛があります⁴⁾。

5.ブラザックエノン

サル目、オナガザル科学名は、*Cercopithecus neglectus*. 特徴は白くて長い顎鬚と、オレンジ色の額が特徴です。狭い行動範囲をゆっくり静かに移動します⁵⁾。

6.ブタオザル

サル目、オナガザル科。学名は、*Macaca nemestrina*. 尾の形がブタの尾に似ていることから、この名前が付けられました⁶⁾。

7.カニクイザル

サル目、オナガザル科。学名は、*Macaca fascicularis*. 特徴は実験動物などとして日本に輸入されてきました。順位がはっきりした群れを作り、樹上と陸上で生活します⁷⁾。

感想

天王寺動物園のサルを観察すると、種類によって差はあるけれど人間に似ている部分が見られました例えば、仲間と毛づくろいする姿や戯れる姿などに共通点が見られ、とても興味深かったです。種類によって見た目や特徴が大きく異なるのが面白いと思いました。このフィールドワークで、サルと人間が近い動物であることを改めて実感したので、今回見られなかった種類を調べてみたいと思いました。

【注】

- 1) 天王寺動物園の解説版、
山際寿一（監修）2013『講談社の働く図鑑 MOVE 動物』講談社, p.157.
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 同上



写真1 ドリル（左）フランソワルトン（右） 撮影：下川陽菜

ライオンについて

国際観光学科1年 金 龍起

今回のゼミのフィールドワークでは天王寺動物園を訪れ、さまざまな動物を観察しました。その中でも特に印象に残ったのがライオンです。ライオンは「百獣の王」として知られており、多くの人々に親しまれている動物です。私は今回、ライオンの生態だけでなく、人間との関わりや歴史的なイメージについても考えながら観察を行いました。

ライオンはネコ科に属する肉食動物で、主にアフリカに生息しています。オスは大きなたてがみを持ち、その姿は非常に威厳があります¹⁾。

また、事前学習で読んだ資料によると、ライオンは古代から人間にとって特別な存在でした。古代エジプトでは太陽や王権の象徴とされ、アッシリアでは王がライオン狩りを行うことで権力を示していたそうです。さらにヨーロッパでは勇気や高貴さの象徴として扱われ、多くの紋章や芸術作品にも描かれてきました²⁾。このようにライオンは単なる動物ではなく、人間の歴史や文化の中で重要な意味を持つ存在だったことが分かります。

資料には、古代ギリシャの学者アリストテレスやローマの博物学者プリニウスによるライオンの記録も紹介されていました³⁾。しかし、その中には現在では誤りとされる内容も含まれています。当時はライオンを実際に観察する機会が少なく、伝聞や想像によって語られることが多かったためです。このことから、動物に関する知識は実際の観察や研究によって発展してきたことが分かります⁴⁾。動物園はそのような学びの機会を提供する重要な施設であると感じました。

実際に天王寺動物園で見たライオンも堂々としており、ゆっくりと歩く姿から強さを感じました。一方で、私が観察した時間帯には横になって休んでいる時間が長く、猛獣という印象だけではなく落ち着いた一面も見ることができました。動物園で実際に観察することで、映像や写真だけでは分からないライオンの特徴を知ることができました。

今回のフィールドワークを通して、私はライオンに対する見方が変わりました。以前は「強くて恐ろしい動物」という印象を持っていましたが、実際には穏やかに過ごす時間も長く、仲間との関わりを大切にしている動物であることを知りました。また、ライオンが長い歴史の中で人間から特別な意味を与えられてきた理由についても理解を深めることができました。

今回の天王寺動物園でのフィールドワークでは、動物を直接観察することの大切さを学びました。ライオンの生態や特徴だけでなく、人間との歴史的な関係についても知ることができ、とても有意義な経験となりました。今後も動物園を単なる娯楽施設としてではなく、生物や文化について学ぶ場として活用し、さらに理解を深めていきたいと思います。



写真1 オスのライオン 撮影：金 龍起

注

- 1) 山際寿一（監修）2013「講談社の動く図鑑・MOVE 動物」講談社，pp.106-107.
- 2) 同書，pp.106-107.
- 3) 同書，pp.106-107.
- 4) 同書，pp.106-107.

参考文献

山際寿一（監修）2013「講談社の動く図鑑・MOVE 動物」講談社，pp.106-107.

パンダに負けないレッサーパンダの魅力

国際観光学科 1 年 仲谷望来

1. はじめに

レッサーパンダは、そのかわいらしい見た目から多くの人に親しまれている人気の動物です。しかし、同じ「パンダ」という名前を持つジャイアントパンダと比べると、知名度や注目度の面で劣っているように感じます。近年、日本ではジャイアントパンダがいなくなったことも話題となり、改めて「パンダ」という存在に注目が集まっています。本レポートでは、5 月に行った天王寺動物園での観察をもとに、レッサーパンダの魅力に改めて目を向け、「パンダに負けない魅力」を持つ動物であることを考察します。

2. レッサーパンダとは

天王寺動物園の解説板によれば、レッサーパンダはネコ目、学名は *Ailurus fulgens styani* です。「標高 1800～4000m の森林や竹林で単独生活しています。ササやタケノコを主食とし、小動物や卵、果実も食べます。木登りが上手で、動物園では木の上で休息している姿がよく見かけられます」と述べています¹⁾。

3. パンダの呼び名

一般的に「パンダ」というと、白黒のジャイアントパンダを思い浮かべる人が多いですが、実はレッサーパンダこそが先に「パンダ」として知られていた動物です。天王寺動物園の解説板によれば、レッサーパンダはジャイアントパンダより約 50 年も早くに発見され、その後にジャイアントパンダが発見されたとされています。そのため、もともと「パンダ」という名前はレッサーパンダに付けられたものであり、後から見つかったジャイアントパンダは「大きいパンダ」、レッサーパンダは「小さいパンダ」という意味でその名前が付けられました。このことから、レッサーパンダは「元祖パンダ」ともいえる存在です²⁾。

4. 足の特長

レッサーパンダは、二本足で立つことができる動物として知られています。『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』によると、レッサーパンダは後ろ足に特徴があり、かかとを地面につけてバランスよく立つことができます。このような行動を「蹠行性」と呼ばれています。また、足の裏には毛が生えており、寒い山岳地帯でも足の裏から熱を逃さないように適応している。このような体のつくりも、自然環境の中で生きるための工夫の一つです³⁾。このように、レッサーパンダが立つ姿には、体の構造や環境が深く関係していることがわかります。

私が見たときには、レッサーパンダは赤茶色をしていて、寝ていました。丸い顔をしてい

て、目がくりくりしていてかわいい顔をしていました。大きさは乳幼児と同じ位で、中型犬位の大きさでした。また、木の上で寝ていました。

5. まとめ

以上のことからパンダにも負けないようなレッサーパンダの魅力が分かりました。天王寺動物園で見たレッサーパンダは赤茶色でグッズ化しても映えるみためで、寝ている姿もゆとり世代に合う動物であると考えられます。私は、レッサーパンダにフォーカスを当てる事に大いに賛成です。



写真1 天王寺動物園のレッサーパンダ。撮影：仲谷望来

【注】

- 1) 天王寺動物園解説板
- 2) 同上
- 3) 山際寿一（監修）2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社, p.88.

【参考文献】

山際寿一（監修）2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社, p.88.

ジャガーについて

国際観光学科 1 年 蓮井 梨央

私は天王寺動物園でジャガーについて調べました。ジャガーはネコ科の動物で、新大陸に生息する哺乳類の中では最大級の猛獣です。資料によると、ジャガーとピューマについての記録は 16 世紀のスペイン人による新大陸探検の時代までさかのぼることができます。当時のアステカ王国ではモンテスマ 2 世が大規模な動物園を作り、そこに集められていたジャガーをヨーロッパ人が目にしたそうです¹⁾。

ジャガーはヒョウによく似ていますが、体の模様に違いがあります。ヒョウの斑点は黒い点だけで構成されていることが多いですが、ジャガーはバラの花のような輪状の模様の中央に小さな黒点があります。この特徴によってヒョウと区別することができます。展示されていたイラストを見ても、模様がとても特徴的で美しいと感じました²⁾。

また、ジャガーは中南米の先住民から特別な存在として扱われてきました。資料には、創世神話にも登場するほど広く畏敬の対象になっていたと書かれていました³⁾。単なる動物ではなく、人々の文化や信仰とも深く関わっていたことが分かります。私はジャガーがこれほど重要な意味を持つ動物だとは知らなかったので驚きました。

さらに、天王寺動物園で見た解説板によると、ジャガーは現在「準絶滅危惧 (NT)」に分類されています。トラやユキヒョウほど危険な状況ではありませんが、生息地の減少や人間活動の影響によって数が減少しています。ネコ科動物の多くが絶滅の危機にあり、自然環境を守ることの大切さを改めて感じました⁴⁾。

今回ジャガーについて調べてみて、見た目のカッコよさだけでなく、長い歴史や文化との関わりを持つ動物であることを知りました。また、絶滅の危機にある動物たちを守るために動物園が果たしている役割についても考えることができました。これから動物園へ行くときは、動物をただ見るだけでなく、その生態や置かれている状況にも注目したいと思います。

注

1) 荒俣宏 1988 『世界大博物図鑑・第 5 巻・哺乳類』 平凡社, p.120.

2) 荒俣宏 1988 『世界大博物図鑑・第 5 巻・哺乳類』 平凡社, p.113, 122.

3) 荒俣宏 1988 『世界大博物図鑑・第 5 巻・哺乳類』 平凡社, p.122.

4) 天王寺動物園の解説板



写真1 ジャガーのロン 撮影：渡辺和之

天王寺動物園のキリンについて

国際観光学科 1 年 小田島 栞那

私は天王寺動物園で飼育されているキリンについて調べ、実際に観察した内容と合わせてまとめました。

天王寺動物園には現在、アミメキリン(*Giraffa camelopardalis reticulata*)の「ハルカス」と「幸弥(こうや)」に2頭が飼育されています。ハルカスは雌、幸弥は雄であり、アフリカサバンナゾーンで暮らしています。天王寺動物園によると、幸弥は2013年に姫路セントラルパークから来園し、ハルカスは2014年に近鉄グループから寄贈された個体であります。また、「ハルカス」という名前は大阪のランドマークである「あべのハルカス」に由来しているそうです⁽¹⁾。

実際にキリンを観察すると、その大きさに圧倒されました。写真や映像では見たことがありましたが、目の前で見ると首や脚の長さが想像以上でした。ゆったりと歩く姿には大きな迫力がありました。一方で、動きはとても落ち着いており、周囲を見渡しながらかゆゆっくり行動する様子が印象的でした。私はこれまでキリンについて「首の長い動物」という程度の認識しかありませんでした。実際に観察することで、その体の大きさや存在感を強く感じる事ができました。

また、天王寺動物園ではキリンの繁殖にも力を入れています。天王寺動物園の発表によると、2022年4月26日にハルカスが赤ちゃんを出産しました。父親は幸弥であり、このペアによる繁殖は3回目です。赤ちゃんは生まれてから約2時間後に立ち上がり、母親の乳房を探す行動も確認されました⁽²⁾。しかし、その後体調が悪化し、生後6日で死亡したことが報告されています。飼育員は24時間体制で見守りや人口哺乳を行っており、命を守るために懸命な努力を続けていたことがわかりました⁽³⁾。

さらに、天王寺動物園のスタッフブログには、ハルカスの妊娠中の様子や出産に向けた準備について詳しく記載されている。飼育員は毎日のように体調や行動を観察し、安全に出産できるように環境を整えていたそうです。私はこれらの情報を調べるまで、動物園は動物を展示する場所というイメージが強かったのですが、実際には動物の健康管理や繁殖活動、さらには種の保存にも大きく貢献していることを知りました⁽⁴⁾。

今回キリンについて調べ、実際に観察したことで、動物園の役割に対する考え方が変わりました。来園者は動物を見ることを楽しむが、その裏側では飼育員が日々努力を積み重ね、動物たちの命を支えています。特にキリンの繁殖への取り組みからは、動物を次世代へつないでいこうとする動物園の重要な使命を感じました。



写真1 天王寺動物園のアミメキリン 撮影：小田島栞那

注

(1)天王寺動物園公式ホームページ

<https://www.tennojizoo.jp/-gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月10日）

(2)天王寺動物園「天王寺動物園でキリンの赤ちゃんが生まれました」

<https://www.tennojizoo.jp/category/blog/-gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月10日）

(3)天王寺動物園「キリン新生児の死亡について」（閲覧日：2026年6月10日）

<https://www.tennojizoo.jp/category/blog/-gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月10日）

(4)天王寺動物園スタッフブログ「キリンに関するお知らせ」

<https://www.tennojizoo.jp/category/blog/-gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月10日）

参考文献

山際寿一（監修）2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社, p.122.

天王寺動物園のアムールトラについて

国際観光学科 1 年 桐生 愛和

私は 5 月 23 日にフィールドワークで天王寺動物園に行きました。特にアムールトラについて調べました。トラを調べた理由は、トラが好きだからで、見た目だけではなく、生態や特徴についてもっと詳しく知りたいと思ったからです。

『講談社の動く図鑑 MOVE：動物』によると、トラはネコ科のなかでいちばん大きく、夜行性の獰猛なハンターです。広いなわばりを持ち、単独で暮らしています。身長 198～370 cm で体重は 91～423 kg です。地球上で生きている場所は東南アジア～インド、シベリア東部です。すんでいる環境は森林、湿地です。おもに食べているものは大型哺乳類、小動物、鳥、魚などがあります。地域によって、体の大きさ、毛の長さ、色、しまの数に差があります。最大の亜種はアムールトラで、最小はスマトラトラです。トラはシベリアが起源だとされています。アムールトラはほかのトラがすむ地域にくらべて、気候ははるかにきびしいのですが、そのぶん、人間の数が少なく、トラたちは広大な地域を自由に歩きまわることができます¹⁾。

また、同図鑑によると、トラには、5 種類います。

1. アムールトラはロシア東部、中国東北部、北朝鮮北部に生息しています。
2. スマトラトラはスマトラ島に生息しています。
3. ベルシャトラはアフガニスタン北部、イラン北部などに生息していましたが、絶滅しました。
4. ベンガルトラはインド、中国南部、ネパール、ブータンなどに生息しています。
5. アモイトラは中国にいましたが絶滅してしまいました²⁾。

天王寺動物園の解説板によると、トラは森林性で、熱帯雨林から針葉樹林まで様々な環境に住んでいます。なかでもアムールトラは最も北に棲む、最も大きな亜種です。アムールトラには、防寒対策として長い体毛が密集して生えています。暑い日本の夏は苦手でも、ネコ科には珍しく泳ぐことも得意とし、獲物を追いかけて長距離を泳ぐこともできます。尾でバランスをとるのも得意です³⁾。

トラの仲間はみんな絶滅危惧種です。なぜ減ってきているのでしょうか。(1)森林破壊。暮らせる場所や、えさが減ってしまいます。(2)密猟。毛皮やキバ装飾品、骨などの身体は薬にされます。(3)違法取引。欲しい人がいれば売る人もいます。完全に取りしめるのは難しいのです。100 年前は全部で 10 万頭以上いたとされていますが、現在 3000 頭程にまで減ってしまったそうです⁴⁾。

トラのためにできることは保護団体への寄付をすることです。保護活動を行っている民間団体の多くは寄付で運営しています。パトロールの強化や生態調査の資金になります。また、環境に配慮した製品をつくることです。私たちがふだん買っている紙や木材等は森林を

犠牲に作られていることもあります。環境に優しい商品を作ることを心がけます⁵⁾。

まとめ

トラについて調べて、体の特徴や生態だけではなく、生息地の減少や密猟によって数が減っており、絶滅の危機にあることも知りました。実際に天王寺動物園のアムールトラを見てみて、体が思ったよりも細くて横になっている姿しか見るできませんでした。これからもトラが生き続けられるように、自然環境を守ることや保護活動の大切さについて考えていきたいです。

注

- 1)山極寿一（監修）2013『講談社の動く図鑑 MOVE：動物』講談社， p.60-p.61.
- 2)同上
- 3)天王寺動物園の解説版
- 4)同上
- 5)同上

参考文献

山極寿一（監修）2013『講談社の動く図鑑 MOVE：動物』講談社，



写真1 アムールトラ 撮影：桐生愛和

天王寺動物園のペンギンについて

国際観光学科 1 年 知念 大心

世界大博物図鑑によると、ペンギンはペンギン目ペンギン科(Spheniscidae)の総称です。ペンギンはガラパゴス諸島から南極大陸まで、南半球のみに生息していて、Aptenodytes 属(コウテイペンギン、オウサマペンギン)、Pygoscelis 属(アデリーペンギン)、Spheniscus 属(フンボルトペンギン)などの 16 種類が生息しています⁽¹⁾。

天王寺動物園の「動物図鑑」によると、天王寺動物園には現在、「フンボルトペンギン(*Spheniscus humboldti*)」が飼育されています。フンボルトペンギンは南アメリカの海岸沿いなどの温帯地域に生息しています。彼らの餌は小魚やカニ、エビ、イカなどを捕まえて食べます。彼らは岩の隙間やサボテンの下にトンネルを掘って巣を作り子育てをします。特徴的なのは、外見の翼はフリッパーと言ひ、他の鳥に比べ固く頑丈です。このフリッパーを上手に使うことで海の中を素早く泳いでいます。彼らの体重は 4-5kg、体長は 50cm 程度です⁽²⁾。

実際に動物園で観察すると、フンボルトペンギンの胸には黒い線があり、くちばしの周りがピンク色である点が印象に残りました。小さい体なのに、水中をものすごいスピードで泳いでいました。陸上ではよちよちと歩いているのに、水中では人間が泳ぐよりもはるかに速いスピードでした。

今回のレポートを通して、ペンギンには様々な種類があり、それぞれ生息する地域や特徴が異なることを知りました。特に、フンボルトペンギンが温帯地域に住んでいることが印象的でした。自分はこれまで、ペンギンは寒い地域にしか生息していないと思っていました。しかし、暖かい地域にも生息していることを知り、新たな発見になりました。今後は、ほかのペンギンの種類についても調べてみたいと思いました。

参考文献

(1)荒俣宏 1993『世界大博物図鑑第 4 巻[鳥類]』平凡社, pp.32~33.

(2)天王寺動物園・動物図鑑「フンボルトペンギン②」

<https://www.tennojizoo.jp/picturebook/bird/humboldtpenguinnew/>

(閲覧日：2026 年 6 月 10 日)

天王寺動物園は、大阪市にある歴史ある動物園で、多くの動物たちが飼育されています。その中でもツル科であるタンチョウ *Grus japonensis* は、優雅な姿と美しい羽を持つ鳥として来園者の注目を集めています。

私は天王寺動物園に行き、実際にタンチョウを見てきました。実際にタンチョウを見て印象に残ったのは、その大きさと美しさでした。思っていたよりも体が大きく、赤と黒のコントラストがとてもはっきりしていて遠くから見てもすぐに見つけることができました。また、歩く姿は優雅で落ち着いており、まるでゆっくり時間が流れているように感じられました。

また、天王寺動物園のタンチョウの看板によると、「日本では、釧路湿地に生息していて、特別天然記念物に指定されています。夏になると湿原に巣を作って 10 cm ほどの大きさの卵を産みます」と述べていました¹⁾。

そして私は、なぜツルは縁起がいいとよく言われるのかという疑問を持ち、考察してみました。一つ目は、「長寿の象徴」である点だと考えました。古くから鶴は千年と言われ長く生きるイメージが人々の間で広まっています。このことから鶴は長生きや健康を願う象徴として大切にされるようになったと考えました。

二つ目は、日本文化との関わりが大きいという点です。折り鶴や日本画、着物の柄など鶴は様々な場面で用いられてきました。特に折り鶴は平和の象徴として知られています。

以上のことから鶴は単に美しい鳥であるだけでなく、「長寿」「平和」といった人々の願いや価値観を体現する存在であるため、縁起がいいとされてきたのではないかと考察しました。

今回のフィールドワークでは、写真や映像で見ただけでは分からないタンチョウの大きさや動き、迫力を実際に感じる事ができた。動物を直接観察することで、その特徴や生態についてより深く理解することができた。なお、天王寺動物園での観察は、野生動物の保護や自然環境の大切さについて考える良い機会となった。



【注】

1)天王寺動物園解説板

【参考文献】

天王寺動物園解説板

天王寺動物園のオオカミについて

国際観光学科 1 年 田丸 雄大

天王寺動物園にはオオカミがいます。オオカミはイヌ科に属する肉食動物であり、主に北半球に広く分布しています。天王寺動物園のホームページによると、オオカミは野生動物として高い知能と社会性を持ち、6~10 頭ほどの家族で構成される群れで生活をしています。群れの中には順位があり、第一位のオスとメスのみが繁殖し、他のメンバーは狩りや子育てのサポートを担当します。順位は変わることもあり、繁殖期前になると闘争が激しくなります。闘争に負けると順位が下がったり、群れにいられなくなることがあります。その場合、群れを離れて単独生活をしますが、生存率は低くなります。獲物を探すために長時間走る体力があり、6 時間以上走り続けた例もあります。遠吠えや尿マーキングで、縄張りを主張します。ちなみに天王寺動物園にいるのはチュウゴクオオカミ (*Canis lupus chanco*) という種類のオオカミです⁽¹⁾。

日本にいたオオカミにニホンオオカミ (*Canis hodophilax*) がいました。天王寺動物園の説明によると、ニホンオオカミはタイリクオオカミ (*Canis lupus*) より体が小さく、肢が短い点の特徴であり、北海道以外の全国に生息していました。1905 年に奈良県で発見された個体を最後に絶滅したとされています。臆病な性格で、積極的に襲うことはないのですが、病気にかかっていると人を襲うこともあります。紀伊半島ではオオカミの墓荒らしを防ぐために、墓の前に鎌を立てたり、嫌な匂いの植物を置いたりしていました。日本ではオオカミは畑を荒らすシカやイノシシを狩ることからニホンオオカミを神とする狼信仰が続いており、オイヌ様と呼ばれています。ニホンオオカミは生態や生息数がほぼ知られないまま絶滅しました。逆にキリスト教ではオオカミは悪魔とされているため、日本の狼信仰は世界的に見ても珍しい信仰であります⁽²⁾。

世界大博物図鑑によると、北欧神話でもオオカミは暴れ者であり、大いに荒れまわります。オオカミの姿で登場するフェンリルは主神オーディンを呑み込むし、その子孫である双子のスコルとハティは太陽と月を地の果てまで追いかけ、ついには呑んでしまいます。またオーディンに仕えるゲリとフレキという 2 頭のオオカミは、オーディンに捧げられた食べ物を、すべてたいらげてしまうと言います⁽³⁾。

今回の天王寺動物園でオオカミを調べました。日本では神様として信仰されていて外国では悪魔とされていて日本と外国では印象が全然違うことが分かりました。ニホンオオカミは生態や生息数がほぼ知られずに絶滅したということが分かりました。これから動物園に行くときにオオカミを中心に観察していきたいと思いました。

(1)天王寺動物園・動物図鑑「チュウゴクオオカミ」

<https://www.tennojizoo.jp/picturebook/savanna/chinesegreywolf/#gsc.tab=0>

(閲覧日：2026 年 6 月 17 日)

(2)天王寺動物園の説明板

(3)荒俣宏 1996『世界大博物図鑑 5 巻「哺乳類」』平凡社, p.138, 139.

参考文献

荒俣宏 1996『世界大博物図鑑 5 巻「哺乳類」』平凡社, p.138, 139.



写真1 天王寺動物園のチュウゴクオオカミとニホンオオカミの解説板

撮影：田丸 雄大

カバについて

国際観光学科 1 年 内富 愛心

私は今回のフィールドワークを行った天王寺動物園で飼育されているカバについて調べました。今回、カバは屋外展示場に 2 体、水中展示場に 1 体展示されていました。主に観察したのは、水中展示場で飼育されていた「ゲンちゃん」です。



写真 1 水中展示場にいたカバのゲンちゃん

調べてみると、このゲンちゃんは元々雄として育てられてきていたものの 2024 年 4 月に行われた DNA 鑑定によって 7 年越しにメスであることが判明し、大きな話題となりました¹⁾。

今回観察したものの、一点でただ沈んでいる様子しか見られませんでした。ただ、想像以上におおきく、目視でわかる重量感に思わず圧倒されました。水中展示前に、カバについての説明の掲示があったので、その掲示の内容をまとめたものや、更に掘り下げた内容を以下に述します。

『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』によると、カバはサバンナと呼ばれる草部にある川・沼・湖で暮らしていて、基本群れで行動します。しかし更に調べるとすべてのカバに共通して言えることはありませんでした。カバはカバ科に属し、①カバ(オオカバ)(*Hippopotamus amphibius*)、②コビトカバ(*Choeropsis liberiensis*)の 2 種類が存在します。この 2 種の違いは、単純な大きさ

だけの違いではなく、生物学的に「属」から異なるまったく別の動物であるそうです²⁾。「カバ科」には、小型で森林にすむコビトカバと、大型で草原にすむカバの2種がいて、おもに草を食べます。昼は、どちらも水のある場所か、湿気の多い居場所にいます」と言うのが特徴です³⁾。この点を抑えると、カバは乾燥したところが苦手な生物であることがわかりました。

天王寺動物園で飼育されていたのはカバでした。学名がヒポポタマス・アンフィビウスの方です。ここからの説明は、動物園内に展示されていた掲示板の内容を含むため、すべて「カバ」（ヒポポタマス・アンフィビウスの方）に関する説明になります。

① カバは大食漢

野生では、草や水生植物を1日で40 kgから50 kg食べます。

② カバのまきフン

カバは生活においてフンをするときに尻尾を振り回してまき散らし、縄張りの印づけ、威嚇を行います。この行動に対し、アフリカでは下の画像のような民話が伝えられています。

- ③ なぜ「まきふん」をするの。カバは大昔は陸上で生活する動物だったそうです。ところがカバが住むアフリカはとてもあつい所でした。ある時、カバは神様にどうか水の中で暮らせるようにして下さいとお願いしました。でも神様は草ばかり食べるのに飽きて、魚を食べようと思っているのだと言って、願いを聞いてくれません。そこでカバは、これからは糞をする時にはバラバラにまき散らし、魚の骨が入っているかどうか、見えるようにしますと約束し、願いを聞いてもらえました。それ以来、カバは尻尾を振り回しながら、糞をするようになったということです。かわいい♡

④ 血の汗

「血の汗」というものは存在せず、これはカバの皮膚から分泌される赤い粘液のことです。このことをメディアなどでは比喻表現として血の汗と言われます。この粘液には日焼け止め・抗菌・保湿といった三つの力を持っています。この「汗」を表現として使った絵本がありました。「さようならカバくん」という絵本で、戦時中の2匹の動物園のカバに関する実際にあった話を物語として描いたものです。

話の趣旨とずれますが、遠回しな表現やカバの心情を書き起こしていて、動物の命と戦争についてとても考えさせられる絵本でした。

まとめ

今回、観察に加えてカバの生態について調べました。動物園の中ではメジャーな動物であるにもかかわらず、想像以上に知らないことや、意味のある行動が多くて衝撃的でした。私はまきフンにまつわる民話があるというのが特に印象に残っています。

今回は観察で得た情報よりも、自身で調べて得た気づきのほうが多かったのも、また機会があ

ればゲンちゃんを観察しに天王寺動物園へ足を運びたいです。

引用

- 1) 天王寺動物園「カバ ゲンちゃんについてのお知らせ」
<https://www.tennojizoo.jp/blog/24296/#gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月17日）
- 2) 山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社， p.106, 195, 197.
- 3) 山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社， p.106

参考文献

山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社

天王寺動物園「カバ ゲンちゃんについてのお知らせ」
<https://www.tennojizoo.jp/blog/24296/#gsc.tab=0>（閲覧日：2026年6月17日）



写真2 カバ展示場の目の前にある掲示 撮影：内富愛心

天王寺動物園のハイエナとハイエナについて

国際観光学科 1 年 北野拓海

天王寺動物園には、迫力のある動物として人気のハイエナがいます。ハイエナは「死んだ動物を食べるだけの動物」というイメージを持たれることが多いですが、実際には優れたハンターでもあり、とても賢い動物です。私は天王寺動物園のハイエナについて調べ、見た目だけでは分からない魅力を知ることができました。

天王寺動物園の解説板によると、ハイエナはアフリカを中心に生息しており、特にブチハイエナ（学名：*Crocuta crocuta*）が有名です。体は犬のように見えますが、イヌ科でもネコ科でもなく、ハイエナ科という独立した科に属しています。前足が長く、後ろ足が短いため、少し前かがみの姿勢で歩くのが特徴です。また、非常に強いあごを持っており、骨までかみ砕くことができます。そして、ハイエナが噛み砕いた骨が土に素早く還り、サバンナの草原が豊かに保たれるのです。そのため、ほかの動物が食べ残した骨や皮まで無駄なく食べることができ、サバンナの生態系を支える重要な役割を果たしています⁽¹⁾。

天王寺動物園では、ハイエナの歩く様子や休んでいる姿を近くで観察することができます。実際に見ると、想像していたよりも体が大きく、力強い印象を受けました。また、鋭い目つきや大きな口からは野生動物らしい迫力を感じました。一方で、仲間同士でコミュニケーションを取る様子や、落ち着いて過ごしている姿からは、知能の高さやチームワークも感じられました。解説板によると、ハイエナは知能の高さとチームワークを活かして自分よりもはるかに大きいシマウマやキリンも倒すこともあるそうです。ハイエナは群れ（クラン）で生活し、協力して狩りをすることもあります。ライオンに獲物を奪われることもあります。逆にハイエナがライオンから獲物を取り返す場合もあり、とてもたくましい動物だそうです⁽²⁾。天王寺動物園には、「レイ」と「ハナ」という名前のブチハイエナがいます。2匹は、別々の動物園から来ています。レイは、食べることが大好き！ですが、カメラのレンズが苦手で見るとおどおどするらしいです。ハナは、優しいきれいな顔立ちですが、なかなか気が強いみたいです。時々、レイがやられているらしいです⁽³⁾。

今回、天王寺動物園のハイエナについて調べたことで、ハイエナは怖いだけの動物ではなく、自然界に必要不可欠な存在であると分かりました。見た目やイメージだけで判断せず、動物の特徴や役割を知ることが大切だと思いました。これから動物園に行くときは、動物たちの行動や暮らしにも注目しながら観察したいと思いました。



写真1 天王寺動物園のハイエナ 撮影：北野拓海

注

(1)天王寺動物園の解説板

(2)同上

(3)同上

参考文献

天王寺動物園の解説板

1.はじめに

私は天王寺動物園で飼育されているクマについて調べました。

2.マレーグマについて

天王寺動物園で飼育されているクマはマレーグマ(*Helarctos malayanus*)という種類です。講談社の動く図鑑 Move によると、体長は 1.2-1.5m で、クマの中で一番小さく、夜行性で木登りが得意だそうです。長い時間を木の上で過ごし、果実や昆虫を食べるのだそうです¹⁾。たしかに、実際見てみると、人間の背丈よりも低く、私が想像したクマより何倍も小さくて、迫力はありませんでした。だが、クマらしい体つきをしていました。

3.マレーグマの生息地と減少

天王寺動物園の動物図鑑によると、マレーグマは、東南アジアの熱帯から亜熱帯に住んでおり、木登りが上手で、昼間は木の上に枝で棚を作って寝ることが多いです。しかし、害獣として駆除されたり、住む場所がなくなって数が減っています。マレーグマの食事は、木の幹やシロアリのアリ塚を鋭いツメで崩し、中の昆虫を長くて器用な舌を使い食べるのだそうです²⁾。

天王寺動物園のサイトによると、マレーグマの個体数は過去 30 年間で 30%以上も減少していると言われています。IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストでは、マレーグマは保全活動によって回復の可能性がある種を指す「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」に指定されています。このまま個体数が減少していくと、野生のマレーグマを見られなくなる未来が訪れるかもしれません。マレーグマがこれほどまでに数を減らした主な原因としては、生息地の減少、違法な飼育やペット目的の密猟や取引などが挙げられます³⁾。

2.マレーグマ減少の要因

ちなみに 5 月 16 日は世界マレーグマの日なのだそうです。この日は、BSBCC（ボルネオマレーグマ保護センター）が、ボルネオ島のマレーシア・サバ州にある、世界最大級のマレーグマ保護施設が世界で初めて野生復帰を果たしたことを記念して制定したそうです⁴⁾。この施設のサイトによると、ボルネオ島の熱帯雨林は違法な伐採やプランテーション（大規模農場）への転換で年間数千km²のペースで失くなっています。プランテーションで主に栽培されるのはアブラヤシ、パーム油の原材料で、日本にも輸出されています。パーム油は「植物油」として流通しており、我々も日常的に目にするパンやカップラーメンなどの食品から洗剤にまで使用されています。また、マレーグマの胆嚢は漢方薬の原材料

として高値で取引されるため、それを目的とした密猟が絶えません。中国やベトナムでは胆汁を搾取するクマ牧場が未だ存在します。マレーグマは保護種であり殺害することは禁止されていますが、多くの国と地域では管理が行き届いていないのが現状なのだそうです⁵⁾。

5.まとめ

私は、今回天王寺動物園で飼育されているマレーグマについて調べました。マレーグマは世界で最も小さいクマで、実際見てみると人間ぐらいのサイズ感で親近感を感じました。また、マレーグマは木登りが得意で、長い舌を使って昆虫を食べるなど、他のクマにはない特徴を持っており、とても興味深い動物だと感じました。

しかしその一方で、現状は熱帯雨林の大規模プランテーション化によって居場所をなくしていたり、お金を目的として、マレーグマを密猟するなどの絶滅の危機に直面している事もわかった。私たちが普段使っている食品や日用品にも含まれるパーム油の生産が、生息地の減少につながっている事を知り、身近な生活と野性動物の問題が深く関わっている事を知りました。

今回の調査を通じて、動物園は動物を展示するだけでなく、絶滅危惧種の保護や種の保存に大きな役割を果たしている事を学びました。これからは動物を見るだけでなく、その動物に置かれている問題やその背景に目を向け、私たちに出来ることを考えていきたいと思いました。

1)山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社, p.79.

2)天王寺動物園・動物図鑑「マレーグマ」

<https://www.tennojizoo.jp/picturebook/bird/malayansunbear/#gsc.tab=0> (閲覧日：2026年7月15日)

3)天王寺動物園「5月16日の世界マレーグマの日にイベントを実施しました！」

<https://www.tennojizoo.jp/blog/45697/#gsc.tab=0> (閲覧日：2026年7月15日)

4)同上

5)一般社団法人ボルネオマレーグマ保護センター「マレーグマについて」

<https://www.bsbccjapan.org/> (閲覧日：2026年7月15日)



写真1 天王寺動物園のマレーグマ。当日は就寝中でみることはできませんでした。
撮影：増田丈浩

天王寺動物園の歴史について

国際観光学科 1 年 下井望稀

私たちは5月23日に大学入門ゼミのフィールドワークで天王寺動物園に行きました。天王寺動物園は大阪市内にある身近な観光施設であり、私も子どもの頃に訪れた経験がある。しかし、動物を見るだけの場所だと思っていた動物園にも、長い歴史があり、時代の変化とともに役割を変えてきたことを知り、その背景について詳しく学びたいと思いました。また、大阪を代表する施設の一つである天王寺動物園が、どのように誕生し、人々に親しまれてきたのかを知ることは、地域の文化や観光の発展を理解するうえでも重要であると考え、このテーマを選びました。

天王寺動物園は1915年（大正4年）1月1日に開園し、2025年（令和7年）には開園110周年を迎えた長い歴史を持つ動物園です。現在約11ヘクタールの国内におよそ170種1000点の動物を飼育しています。国内の展示では、動物の生息地の景観を可能な限り再現したうえで、そこに暮らす動物の様子を紹介する「生態的展示」が人気を博しています。「ペンギンパーク&アシカワーフ」、爬虫類生態館「アイファー」、カバやキリン、ライオンなどが暮らす「アフリカサバンナゾーン」などで生態的展示を取り入れ、様々な生き物が暮らす自然環境を感じていただけます。また、天王寺動物園では様々なイベントも開催しています。餌を食べるいきいきとした動物の姿をご覧いただける、ごはんタイム・おやつタイム。担当スタッフのガイドも楽しめる、テンジクネズミのかんさつじかん、ヒッジとヤギのかんさつじかん。その他にも、普段は見られない動物たちの夜の姿が見られる期間限定のナイトZOOや、季節に合わせたイベントなどでお楽しみくださいとのことでした¹⁾。

天王寺動物園の歴史を調べて、100年以上もの長い間、多くの人々に親しまれてきたことに驚きました。また、戦争や時代の変化を乗り越えながら発展してきたことを知り、天王寺動物園の歴史の深さを感じました。現在では動物の保護や環境教育にも力を入れており、単なる動物園ではなく、社会にとって大切な役割を果たしていることが分かりました。今回調べたことで、実際に訪れた際には動物だけでなく、動物園の歴史にも注目してみたいと思いました。

【注】

1)天王寺動物園の説明版

天王寺動物園のシマウマについて

国際観光学科 1 年 居原咲來

私は天王寺動物園で飼育されているシマウマについて調べました。シマウマはウマ目ウマ科に属する草食動物で、主にアフリカの草原やサバンナで暮らしています。天王寺動物園ではアフリカサバンナゾーンで飼育されており、広い運動場で生活する様子を観察することができます⁽¹⁾。シマウマは馬によく似た体つきをしています、全身にある白と黒の縞模様が大きな特徴だと思います。

シマウマにはサバンナシマウマ、グレビーシマウマ、ヤマシマウマなどの種類がいます。それぞれ生息する場所や体の大きさに違いがありますが、どの種類も草食性で群れをつくって生活します。サバンナシマウマはアフリカの草原に広く分布し、大きな群れを形成することが知られています。グレビーシマウマは細かい縞模様を持ち、ヤマシマウマは山地に生息しています⁽²⁾。

シマウマの体には、自然の中で生きていくためのさまざまな工夫が見られます。頭の後ろの方に目があるので広い視野をもちます。この特徴によって、ライオンなどの天敵が近づいてきたときにいち早く気づくことができると考えます。また、耳を自由に動かして遠くの音を聞き取ることができるため、危険を察知する能力にも優れています。さらに鼻は仲間のおいを感じ取る役割を持ち、群れで行動するときに役立っています⁽³⁾。

口のつくりにも特徴があります。前歯が上下でぴったりとかみ合うため、硬い草をかみ切るのに適しています。シマウマは草原に生える草を主な食べ物としており、長い時間をかけて草を食べながら生活しています。また、足の指は一本になっており、速く走ることができます。これも天敵から逃げるために重要な特徴だと考えます⁽⁴⁾。

シマウマの縞模様は最もよく知られた特徴です。草原でカモフラージュの役割を果たすと考えられています。また、一頭ごとに模様が異なるため、仲間を見分けるのにも役立つと考えます。縞模様は見た目の美しさだけでなく、シマウマが生きていくために重要な意味を持っていると思います⁽⁵⁾。

今回シマウマについて調べて、縞模様だけでなく、目や耳、口、足などにも草原で生き抜くための工夫があることを知りました。天王寺動物園では実際にシマウマの行動や体の特徴を観察することができ、図鑑で学んだ内容をより深く理解することができました。これからも動物たちの生態や特徴について学び、自然や生き物への理解を深めていきたいと思っています。

注

(1) 天王寺動物園公式ホームページ「グラントシマウマ」

<https://www.tennojizoo.jp>（閲覧日：2026 年 7 月 8 日）

- (2) 山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社, P.95.
- (3) 同上
- (4) 同上
- (5) 同上



参考文献

山際寿一 2013『講談社の動く図鑑 MOVE 動物』講談社

天王寺動物園公式ホームページ「グラントシマウマ」<https://www.tennojizoo.jp> (閲覧日: 2026年7月8日)

天王寺動物園公式ホームページ「アフリカサバンナゾーン」<https://www.tennojizoo.jp> (閲覧日: 2026年7月8日)

天王寺動物園のゾウ展示

国際観光学科 1 年 山形 雄也

天王寺動物園でフィールドワークをすることになり、私はゾウのことを調べることにしました。なぜならゾウは動物のなかでも大きい上に、社会性が高く、頭がいい動物だと以前聞いたことがあったからです。

天王寺動物園のホームページによると、ここにいるのはアジアゾウという種類のゾウなのだそうです。オス 1 頭とメス 2 頭がいるそうで、この 3 頭はいずれもマレーシアから今年になってやってきたのだそうです¹⁾。

天王寺動物園のゾウ展示の解説によると、ゾウが健康で自然に近い生活を送れるよう、動物園ではさまざまな工夫をしています。展示場には、餌を隠して探させる「鼻だし穴」や、高い場所の餌を取る「吊り下げフィーダー」があり、野生で餌を探す行動を再現できるようになっています。また、床には砂が敷かれており、足腰への負担を減らすだけでなく、砂浴びや寝転ぶなどの自然な行動もできるようになっています。健康管理では、飼育員とゾウの間に柵を設ける「プロテクテッドコンタクト」という方法が採用され、安全に体調確認や足・爪の手入れを行っています。さらに、展示ではアジアゾウは群れで生活する社会性の高い動物であり、メスと子どもが協力して暮らすことや、オスは成長すると単独で行動することなども紹介されています²⁾。

このような展示から、ゾウの生態や行動だけでなく、動物福祉を大切にしたい飼育方法についても学ぶことができました。天王寺動物園では、ゾウがマレーシアの自然のなかで暮らしていた環境に近い形で飼育する工夫がされておりました。

注

1) 天王寺動物園「アジアゾウ（マレーシアゾウ）をご紹介します」

<https://www.tennojizoo.jp/blog/44678/#gsc.tab=0>（閲覧日：2026 年 7 月 15 日）

1) 天王寺動物園のゾウ展示の解説板

参考文献

天王寺動物園のゾウ展示の解説板

天王寺動物園「アジアゾウ（マレーシアゾウ）をご紹介します」

<https://www.tennojizoo.jp/blog/44678/#gsc.tab=0>（閲覧日：2026 年 7 月 15 日）



写真1 天王寺動物園のアジアゾウ 撮影：山形雄也

おわりに

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。動物園で熱心に学ぶ姿からさぞかしうちの学生は動物に興味があるのかと思われる方もいるかと思います。最後に少しでも種明かししておきたいと思います。

最近の若者はコスパ（コストパフォーマンス）やタイパ（タイムパフォーマンス）を重視する傾向にあります。フィールドワークをして、レポートを書くためには最小限の努力で最大限の成果を出すのだそうです。本来の最大の目的は、フィールドワークを楽しむことであり、レポートはその成果であるにすぎないのですが、レポートを書くことまで学生に強いている以上、彼らはそう考えているのです。

そして、そのために彼らを選んだ場所こそが天王寺動物園なのでした。天王寺動物園には、さまざまな動物がおります。それらの1つを選んでレポートを書けば、必ず1人何らかのレポートが書けます。タイパの上でも、動物園はとてもよい場所だということです。しかも、よその場所に行かなくても天王寺動物園だけでもレポートが書けるのです。

それでいいのだろうか、私としても考えました。大阪にはさまざまな観光地があるのに、動物園一択なのです。国際観光学科の教員としては、もっといろんな観光地が大阪にはあるはずです。そこへ行かずにはたして動物園だけでよいものなのか。

ただ、一方で、生き物文化誌学会会員の端くれとしては、若い人がまじめに生き物のことを学んでくれるのはうれしいことなのです。それに動物園って、大学生が行っても楽しめますし、引率の教員としても、何度行っても飽きないのです。解説や図鑑で調べるとそれなりに勉強になるので、学習効果もばっちりです。

そんな形で、学生のタイパ重視の思考のお陰で、私は生き物について学ぶ機会を楽しんでおります。そのような不埒な私どもをいつも温かく迎えてくれる天王寺動物園の方々や動物たちに変感謝しております（渡辺和之）。

++++++
渡辺和之（編）『2026 度前期大学入門ゼミフィールドワーク報告書』阪南大学国際学部国際観光学科渡辺研究室 2025 年 7 月 25 日発行

〒580-8502 大阪府松原市天美東 5-4-33 阪南大学国際学部国際観光学科

電話：072-332-1224 メール：watanabe@hannan-u.ac.jp URL [https://www.hannan-](https://www.hannan-u.ac.jp/)

[u.ac.jp/](https://www.hannan-u.ac.jp/) Kazuyuki Watanabe (ed.) 2026 Shinsekai and Tennoji Zoo: Students' Fieldwork

Reports 2026. Osaka: Faculty of International Tourism, Hannan University. Address: 5-4-33, Amami-Higashi, Matsubara, Osaka, 580-8502, Japan.

E-mail: watanabe@hannan-u.ac.jp

++++++